【夢幻の大陸詩】　月姫楽土の子供たち

水城杏楠

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
【夢幻の大陸詩】　月姫楽土の子供たち

【Ｎコード】
Ｎ７３１３Ｘ

【作者名】
水城杏楠

【あらすじ】
まだ世界に名前がなかったころ、サーラと呼ばれる地は、巫女とそれを守護する選ばれた者たちを中心とした、小さいながらも秩序ある国だった。だが、謎の男によって民の一人が殺され、それから秩序は少しずつ壊されていく。……巫女の血を引く少年チェザはそんなことなど知らずに、もうまもなく迎える成人の儀式を心待ちにしていた。ーーー舞台は神や精霊を信じていた先史時代、勝者の語る歴史に埋もれて消えた小国の、懸命に生き抜いた栄枯盛衰の物語。

序章　終焉の始まり　1

これは、古の物語。
今はただ、吟遊詩人のみが語り継ぐ、永い永い時を超えた逸話。
セザー＝ラージュ大陸に、ようやく精霊たちの御名のもと、人々が一つの国を作り統治し統治されることを学び、文明が生まれた時。

まだ、世界に名前はなかった。
世界の中心はどこにもなかった。
あるのは真実と、それを疑わないこころ。それだけをもって、彼らは生きている。
月明かりが降り注ぐ、静謐の大地の上で。

＊　＊　＊

皮肉にも、それは闇の日の夜だった。
満月の夜ごとに盛大な祭りが開かれる習慣を持つこのサーラ国の新月の日は、闇の精霊が支配しているということで、まるで死んだ街のような閑寂の中に、民はひっそりと身を潜めている。
「……ルーシファー様がおられない夜に……こんなことになろうとは」
後悔を交えた低い呟きが、人気のない真の暗闇に響いた。
明かりを持って小走りする影が一つ。
くるぶしまでも隠すどころか裾は長く後ろに流した、ゆったりと

した衣服を纏った、まだ二十五歳ほどの青年だった。穢れのない一枚の白く大きな麻の布を身体へ巻きつけ、腰紐を使って留めている。ラカーユと呼ばれる独特な衣装だ。肘あたりから見えている両腕には、太い赤銅色の腕輪をしていた。

長い髪の毛は、黒色にところどころ緑を交えた美しい色あい。その緑は薬草であるラヌーの葉を用いて染めているものだ。それを金色の布で緩く巻いて銀の留め具を髪に差している。この金色の布は、この国において一番の珍品であるトリアの華から取れる金色の綿を伸ばして糸にしたものを用いて織られたもの。

彼が身につけているすべては、貴重で緻密なものだった。

そして、彼のいでたちでもっとも印象的なのは、額に擁かれた十字の紋章だ。

金色のそれは、簡素な十字の形をしているが、どこか聖性を持って、指の第一関節ほどの大きさで額に浮き出ているように見える。人工的なものではない。だが、こんなふうに痣ができることもないだろう。

彼は回廊を無心で歩く。

回廊といっても、土レンガで造られた柱と屋根代わりに掛けられた大きな布、そして歩きやすいように大きめの石を削って平らにしたものを敷き詰めた床があるだけだった。その両側には針葉樹であるスーの樹が植えられている。

木々の間から見える闇色の空には、透き通る満天の星。

それは、今宵が新月であり、闇夜を支配する最も明るい月の存在がないから。

見上げた空から視線を外すと、眼前に小さな明かりが見えた。太い木の棒に使われなくなった古い布を巻きつけて炎を灯しているそれは、だんだんと彼に近づいているようだった。

「……」

まさか、と青年は懸念し、足を止めた。闇の日の夜に出歩く民など、サーラ国にいるはずはないのだ。

隠れるべきか悩んだ。だが、青年も同じように明かりを手にしている。気づいたと同時に相手にも気づかれているのは必至だった。
青年は覚悟を決めて、気づいていないふりを決め堂々と回廊を歩いていくことにした。
だが、やがて見えた影は、青年と同じような衣を纏う男性だった。その顔には見覚えがある。そして、彼は幼い子供を連れていた。
「チェザ！」
相手もこちらの姿を認識して、名を呼んだ。やはり聞き覚えのある声だった。
「ロア」
同じような衣服を纏い、同じ形の紋章を額に抱く、彼と同年代の男性だ。身長が高く、すらりとした体躯、背中で緩く結ったくせのある赤茶色の髪が生ぬるい風を孕んで揺れていた。
「チェーザーっ」
明るい声とともに、闇の中から走り寄った小さな影を、彼はしゃがみこんで軽く抱き留めた。かわいらしい少年だった。彼らと同じような衣だが、少し薄い麻を二枚使用していること、髪の止め具が銀ではなく金色であることなどの違いがある。
「アース様。なりませんよ。このような闇の日にお外に出ては災いが起こるやもしれません」
もうそれはすでに起こっているのだが、あえて青年　　チェザは言わずにおいた。まだ七歳の少年だ。幼い彼をこれ以上脅えさせたくはなかった。
「でもね。僕どうしてもチェザに早く会いたかったの。だから、姉君さまにお頼みしてロアと行っていいってことになったの。みんなすごく心配そうなお顔をしているよ。でも、チェザはきっと笑ってくれると思ったから」
幼いアースですら、周りの人々の顔色を見て不安になっている。チェザは炎を灯した木杖を石の間に差し込み、彼を少し強く抱きしめてやった。

「大丈夫でございますよ。アース様は何も心配なさらずとも、我らリアスがサーラ国をお守りしておりますから」
「うんっ。チェザならそう言ってくれると思ってた」
アースはチェザの腕の中で、安心したように笑顔を宿した。身体を離してチェザもそれに笑みを返すと、木杖を持ち直して立ち上がる。そして、傍らに待つロアを見た。
「……月姫の巫女様、は」
おそるおそる尋ねる。
今もっとも知りたい情報を。簡潔に。
「心配はいらぬ。無論ご無事でいる」
当然のように、ロアは無表情のまま答えた。
「おさすがだな。このような状況にあっても落ち着いておられる……。おれにチェザの様子を見てくるようにとお命じになったからこうして迎えに来たのだ」
「ーーーそうか」
まずは安堵し、ほっと一息ついた。翳っていた彼の藍色の瞳にいくらか光が戻る。
肩の荷が半分降りた感じが、した。
チェザは木杖をロアに渡し、アースを抱き上げる。静かな闇夜に、幼い少年のうれしそうなはしゃぎ声が響いた。
こういうときはやはり、子供の無垢さがうらやましくもあり、またそれに救われる思いもある。
「では急ぐとしよう。早くご無事なお姿を拝見したい」
「そうだな。いま月姫の巫女様は聖月の宮のもっとも奥にある一室におられる。案内しよう」

序章　終焉の始まり　2

磨き上げられた巨大な石の上に何枚もの上質の麻を重ね合わせ、その上に小柄な少女が座っていた。
中肉中背のチェザが立っていても、彼女と同じ目線にはならない高台である。
「月姫の巫女様、チェザ・リアス。ただいま戻りました」
彼女はまず、チェザの身を案じてその無事を喜んでくれた。辛い時であろうに、笑みを浮かべてチェザを迎える。
「ご無事でなによりです。貴方がなかなか来られないので心配しておりました」
彼女のこの声を直に聞くたび、チェザは何かに囚われたような気分になる。
それは、畏怖であり、尊敬であり、または誓いであったりするせいなのだけれども。
玲瓏で、一点の曇りもない。
姿かたちは人間であるけれども、彼女はけっして人ではないからだ。少なくともこの国ではそう思われている。月姫の愛した地サーラでは、この少女こそが月姫の巫女、つまり月明かりの精霊である月霊ルーシファーの娘であるのだから。
額に十字の紋章を擁こうとも、彼らひとの身ではけっして彼女に近づけはしない。気高い瞳はだからこそ、月霊ルーシファーのように美しく金色に輝いている。
民にとって、この世のなによりも高邁な存在。
彼女は淡く微笑んだあと、表情を改めてチェザのとなりにいる小さな少年へとその視線を向けた。
「姉君さま」
「アース。隣のイーザのところへお行きなさい」
柔らかい語調ではあったが、そこには有無を言わせない様子が含

まれていた。これから話す内容はたしかに、月姫の巫女の実弟にあたるこの少年には酷なことかもしれない。
「……でも　　」
なにか言いかけたが、ゆっくりと首を振る月姫の巫女を見てその口を閉ざす。
「はい。わかりました。姉君さま」
アースは何もわからない、幼いだけの少年ではない。賢しく、他人を思いやれる性格だ。ロアが付き添うと申し出たのを彼自身が断って、一人で部屋を出て行く後ろ姿は、小さな少年といえどもチェザには頼もしく見えた。
「さっそくですが、状況を話してくれますか」
実弟の背中をいとおしそうに見送ったあと、表情を改めて月姫の巫女はチェザを見据えた。
その瞳はまるで、世界そのものを示すかのように。
彼女の顔色は心なしか蒼白だ。普段からほとんど太陽にあたることのない月姫の巫女は、もともと病的に近い白さをその肌に宿しているが、今宵はそれがさらに白く、青みを帯びてみえる。錯覚だろうか。チェザは思う。自分のこの不安という感情を彼女と重ね合わせて見ているだけなのだろうか。
「残念ながら聖月の御剣は失われておりました。私が駆けつけたとき、聖月の祠には金の御剣がどこにも……」
感情を出さないように、彼は冷静をもって言葉を紡ぐ。
「金の……？　では銀の御剣は……」
細い眉をわずかにしかめて、彼女は問い掛けた。
東西南北を山と森に囲まれたサーラ国。北の森の中央に聖月の祠は存在した。そこに奉られているのが美しい二振りの短剣だった。どちらも片刃で反りはなく、柄の部分を入れて成人男性の手首から肘ほどまでの長さである。聖月の御剣と総称されるそれらの剣の名を、それぞれ金の御剣、銀の御剣という。
「無事なお姿でした。独断ではと躊躇ったのですが、月姫の巫女様

のお力を頂きたく、御許へ持って参りました」
チャザは服の合わせ目の中から一振りの短剣を取り出した。
銀の柄に銀の刃。片刃のそれは、儚く弱々しいかすかな光を放っている。
それはまるで、片割れを失った悲しみを表わすかのようで……。
月姫の巫女は、おそるおそる左手をチェザのほうへ差し出した。両手でチェザはそれを恭しく差し出すと、彼女はしっかりと受け取り、胸に押し抱く。
愛しそうに。
「あぁ……っ」
慟哭の叫びを上げる少女の胸の中で、銀の刃が輝きを増した。
「……あぁでも、なんとかしなくては。まさかこのような不祥事があるなどとは、今宵は御不在のルーシファー様もさぞお悲しみのことでしょう……」
憂いを帯びた金色の双眸を伏せて、少女はチェザと同じような科白をつぶやいた。
彼らが崇める月姫の巫女はいまだ少女。外見は幼い。十五歳を迎えたばかりだ。いつもは結い上げられ、金の装飾に覆われる長い黒髪も、今はただ背中に流している。その巫女らしからぬ無防備な姿が、チェザに少しだけ人間性を感じさせた。
月姫の巫女の服装はチェザやロアと似ているが、それに緑色が混じっている。それは白い布を一枚だけ使うチェザたちと違い、この少女は白い布と緑に染めた布の二枚を使っているためだった。染め物の技術が確立したのはここ最近の話で、今はまだ月姫の巫女のものにのみ使用される特殊な技術なのだ。
「なんとお詫びしてよいのか……。我らリアスの責任でございます」
「……いいえ。わたくしが誤ったのです。今日は闇の日。何も視えない日であるというのに……」
手の中にある銀の御剣の柄をきつく握り締めて、殊勝な言葉で月姫の巫女は否定した。それだけでもったいなく、また申し訳なくチ

ェザは思う。月姫の巫女に罪悪を感じさせてしまった。
新月を闇の日、そして満月を金の日、半月を銀の日と彼らは呼ぶ。闇の日には、民はもちろん月姫の巫女である彼女ですら、静かに時を過ごし、外出はしない。
「チェザ……私事で申し上げにくいのですが、姉君様は……？　御出産も間近ですのに」
「ファーリー殿はネオンに頼んで参りました。彼女はリアスですし、彼女の友なので出産に立ち会ってもらおうと思っております」
両親を早くに亡くしたためか、月姫の巫女と二つ年上の姉、そしてまだ七歳の幼い弟は仲むつまじく、三人の並んだ姿をよく見かけたものだ。
「……そうですね。貴方の奥方様ですもの。わたくしが心配するまでもありませんでしたわ」
「いえ。月姫の巫女様が心細くお思いだから、聖月の宮の様子を見てくるようにと私に言われたのはファーリー殿でございます。きっと心配しているから、と。ですから私はロアの風霊シルフェを受けてすぐに聖月の祠へ参ったのです」
言葉は風霊シルフェが運ぶもの。それは近くても遠くても同じだった。視界に入らないほど遠くの民とは、意識して風霊シルフェを操ることによって会話を可能にしている。
「……信じがたい思いでしたが」
報告を受けたときの感情を思い出し、チェザは少し苦い表情をした。
たぶん、信じたくなかったのだろう、と冷静な今ならば思う。
今まで民が無断で聖月の祠に侵入したことなどなかったのだ。民にとって聖なる場所であり、侵すべからず地であるはずだ。いったい誰がそんな暴挙を……とチェザが訝しむのも無理はない。
「ならば、早く姉君様の御許へお帰りください。きっと心細くお思いなのは同じ気持ちのはずです」
こころなしか笑って見せて、月姫の巫女は言う。

「……しかし」
チェザとて出産を控えた彼女のそばにいてあげたいと思う。だが、リアスとしての責任がそれを阻むのだ。そして、この儚い様子を見せる月姫の巫女は、彼女の大切な妹であるのだから。
「もう侵入者の姿はどこにもないのでしょう？」
「ですが、彼らの狙いが聖月の御剣なのだとしたら、まもなくこちらへ参られるやもしれません」
聖月の御剣はそれぞれ共鳴し合っている。金を持つ侵入者は、遅からずこの場所を見つけるに違いない。
だが、そんな危険を冒してまで、チェザはこの銀の御剣を持ってこなければならなかった。なぜならそれがこの御剣の意志だから。半身を失った今、この銀の御剣に必要なものは月姫の巫女の聖なる力なのだ。
「彼らはなぜふたつの剣を持っていかなかったのでしょう……？」
ふと気づいたように、ロアが独白する。
「正確には持っていけなかったのです。金の御剣は、身をていして半身を守り抜いたのですから」
双身をもって一対となす、聖月の御剣。
月姫の巫女はその場で何が起こったのかをまるで知り得ているかのように、ロアの疑問にそう答えた。
「視える、のでございますか？　闇の日に……」
月のない新月や雨の日、彼女の力はほとんど失われる。
「いいえ。そんな気がするだけです」
気高い月姫の巫女は、そう言ってすまなそうに聡明な瞳を伏せた。
夜は刻々と更けていく。
侵入者を確認したときの騒ぎとは打って変わって、今は普段の闇の日以上の静けさに覆われていた。なにか得体の知れないものを恐れている雰囲気が全てを支配して。
「……そういえば、ティエ様はどちらへ行かれたんだ？」
チェザは先ほどから気になっていたことを傍らのロアに尋ねる。

「それがな……お姿を見掛けたものは一人もいない。どちらに行かれたのかまったく……」
「……なに？」
十五人あまりの彼らリアスを纏めるべき存在のティエがいない。こういった状況下で、とっさに思い付くのは悪い想像だけだ。
「まさか、ティエ様の御身になにか……」
自分の言葉が真実でないことを祈るのみだ。リアスの長とはいえ、一人の捜索のために戻るのに聖月の祠はまだあまりにも危険すぎる。
「ティエはきっと無事ですわ。わたくしたちは、彼を信じましょう」
「……はい」
月姫の巫女の言う通りにする以外、この場で術はなかった。
ロアが静かに答えた、そのときである。
「……あ！」
「月姫の巫女様！」
二人の叫びが重なる。
両手で握り締めていた銀の御剣を、彼女は条件反射で振り落としていた。
「どうなさいました！」
彼女は両手をぐっと押さえてうずくまった。失礼を承知で、その左手に触れ、手のひらをゆっくりと開かせた。
「……っ」
彼女の双眸に痛みの色が走る。そして、その手のひらを見たチェザは、驚きのあまり言葉を失った。
「……御手、が」
手の平が熱く、まるで炎に燻られたかのように焼けていたのだ。ただれているほどではないにしろ、月姫の巫女の痛々しい姿にチェザは眉根をよせる。
「イーザ様を呼んでこよう！」
「頼む、ロア」
冷静さを装った二人の声音は、だが少し震えていた。

薬草を用いたり、生命の精霊に語りかけたりすることによって肉体の損傷を治療できるリアスは限られている。イーザもその一人だ。チェザやロアにはできない。

チェザは自分の衣の一部を強引に切り裂き、彼女の左手に巻く。同様の処置を右手にもほどこした。彼らの麻の服は縫っているわけではないので、男性の力ならば容易に切り裂くことができた。

「……月姫の巫女様」

気遣わしげに、チェザは月姫の巫女を呼ぶ。

うつむいていた顔を上げて、彼女は淡く微笑んでみせた。

「ありがとう。大丈夫です」

「しかしなぜ……」

ようやくチェザは、月姫の巫女が放り投げた銀の御剣を振り返った。

そして、信じられないというように瞳を見開いた。

カランと音を立てて、床の上に放り出されたそれは、湯に浸していたかのように白い湯気を放っていたのだ。

「銀の御剣が……」

「これは怒り。わたくしたちの心がそうであるように……御剣もまた、自らの怒りを抑え切れずにいるのでしょう……」

このときとっさに浮かんだのは半身の姿だ。月姫の巫女に抱かれているこの御剣ですらこのありさまなのだ。引き裂かれ、聖月の祠から無理矢理に離された金の御剣はどれほどの思いを抱いているだろう。

「月姫の巫女様！」

挨拶もままならず、ロアが一人の男性を連れて戻ってきた。

三十ほどだろうか。精悍な顔立ちの、長身の男である。白い肌はよく日に焼けて、チェザたちと同じ白い麻の服から覗く腕は浅黒くなっており、たくましい筋肉がついていた。

「月姫の巫女様、失礼いたします。イーザ・リアスでございます」

イーザは薬草を溶かした液の入った壷を持っていた。清潔な麻の

布を取り出し、その壷に浸す。チェザの巻いた布を取り、かわりにそれを丁寧に巻いていった。
「感謝いたします。イーザ」
「……」
寡黙なイーザは何も言わなかった。ただ、月姫の巫女に向かって少し頭を下げただけだ。年齢を重要視するこのサーラ国では、月姫の巫女とその家族を除いて、年齢による上下関係がある。チェザはイーザよりも年下なので彼よりさらに一歩下がった。この場合はイーザがより月姫の巫女に近づく権利を持っていることになるのだ。
「しばらく御手を使わぬよう、お願い申し上げます」
「はい」
神妙な顔つきで月姫の巫女は頷いた、その時。
「！」
ほとんど明かりもなく、月姫の巫女の表情をようやく認識できるほどの空間で、突然光が瞬いたのだ。
反射的にその場にいた四人全員が、床に落ちている銀の御剣を振り返る。
「銀の御剣、が……」
これは、なんという輝きだろうか。
壮絶なまでに美しく、また毅く……。
だが、しばし見惚れている時間はなかった。
「……つ、月姫の、巫女……さ……まっ！　ご……無事、で……」
「ティエ様！」
右足を引き摺り、白い麻のラカーユを紅く染めた三十歳ほどの青年が文字どおり転がり込むようにして、現われた。
中心の柱をつかみ、だがつかみそこねてその場に崩れ落ちる。もっとも近くにいたロアが支えようとしたものの、とっさの力では成人男性の体重を支えるにはいたらずに、二人で倒れ込んだ。
即座にチェザとイーザが走り寄る。
「ティエ様！　ティエ様っ！　聞こえますか？　私の声が聞こえま

すかっ！」
懸命なロアの呼びかけに、ティエは首だけをわずかに動かした。
「ここに寝かせろ。人手がいる。誰か呼んでこい。隣にいるはずだ！」
月姫の巫女の手当てをしていたときは無表情だったイーザの顔つきが変わる。怒鳴るように指示を下し、チェザがティエを横たわらせ、ロアは再び部屋を飛び出した。
「……太刀傷、だ」
イーザの抑えた声音が、よりいっそうの現実味をチェザに与えた。おびただしい深紅の液体は、イーザの白い衣をも紅く紅く染めていく。
手持ちの薬壷で手におえるものではない。治療の仕方などまるで知らないチェザでさえそれがわかるほど、ティエの衰弱は激しかった。
「お早く、お逃げ……くだ、さ、い。月姫の、巫女、さま」
「言葉を発してはなりませぬ。動かずに」
穏やかに、だが有無を言わせない口調でイーザが彼を制する。
その間にも応急処置として、彼は持っているだけの布を薬壷に浸し、重傷と思われる右足から巻いていく。すぐにそれは足りなくなり自分の衣を破ると、それを見たチェザもすぐさま自分の衣を提供した。
彼らの衣は薄い一枚の麻から成り立っているものだが、それを広げると平均的な生活水準の民が住む住居には収まりきらないほどの大きさになる。少し切り取ったからといって、夜の寒さをしのげないほどではなかった。
「……月姫の巫女、様？」
いつのまにか月姫の巫女が石の祭壇から降りていた。手の怪我などなかったかのようにあっさりと、銀の御剣を拾い上げるのをチェザは見た。
「……来ます。憎悪が。そして、金の御剣の持つ、悲しみ、が」

月姫の巫女が言い終わる前に、チェザとイーザにも不穏な気配を感じ取ることができていた。
このとき、はじめてチェザは恐怖を……覚えた。
それは今まで、どんなときでも感じたことのない種類の感情。
（……ティエ様。月姫の巫女様）
月姫の巫女は、ティエの傍らに膝をつき、こともあろうか彼らリアスよりも目線を低くしてティエの右手を握り締めていた。そうしているだけで、チェザには癒しの行為に思える。
チェザから見える横顔は、悲しみを帯びてよりいっそう儚く見えた。
「……足音が」
イーザが手を止めずに、そう呟いた。風霊シルフェが運ぶ音。月姫の巫女やリアスの耳は通常のそれ以上の働きをする。
速い足音。
それは確実に近づいていて……。
チェザは立ち上がり、戸口に近づいた。
そこには、男が一人いた。
「……っ！」
一目見ただけで、チェザは慟哭の叫びをあげそうになった。皮肉な宿命を呪いたくなった。
イーザと同じほども背丈があり、左手には輝きをもって抗う金の御剣が握られている。必死の抵抗があったのだろうに、男はこの御剣を手放しはしなかったらしい。その証として、金色の柄は男の血で紅く染まっていた。
そして、右手に握られているのはサーラでは見たこともない形の武器だった。
自分の背と変わらぬ長さのそれは、柄と刃の長さが半々で、その刃は太く重量がかなりあるように見受けられた。両刃からは真新しい血が滴っている。
面立ちもサーラ国の民とはまるで違う。薄い青色をした瞳。そし

てなにより彼らを驚愕させたのは長い髪の毛の色だった。
満月を金色で表わし、金色を月霊ルーシファーのための色とするサーラにとって、彼のその髪の色はまさに冒涜ともとれるものであったのだ。
豊かな黄金の髪。
金色をその身体に纏わせることができるサーラの民は限られているというのに。
（聖なる金色を生まれながらに纏いながら、なぜこのような愚行を犯せるのだ……）
サーラの民にとって、金色の髪を持つ彼の姿はまるで月霊ルーシファーそのものにすら思えた。たとえ、血にまみれた武器を手にしていようとも。
月姫の巫女ですら持ち得ない、金色の髪……。
「　　」
「……何？」
男がなにかを言葉らしきものを発したが、チェザにはわからない。サーラで使われている言葉とはまるで違っているように聞こえた。意味をなさない言葉。ただの奇声にしか思えない。
チェザもイーザもそして、月姫の巫女すらもなに答えられずにその場に固まる。どう反応していいのかわからないのだ。
彼の瞳は冷静に見えた。言葉は理解できなくてもその仕種の一つ一つが雅であり、他人を切り付けたりする精神を持っているようには見えないのだ。彼の無表情がまったく崩れない。行動が読めない。それほどまでに彼は、静かで涼しい顔つきだった。
その男が片足を前へ動かした。
戸口をふさぐチェザが見えていないかのように歩む彼に、チェザは手をかざして行動を阻んだ。
「こちらへは入ることが許されぬ」
「　　」
彼が何かを言った。

その直後。
男の右手が、動いた。俊敏に。
「……っ！」
「チェザっ！」
条件反射的に動いたチェザのうめき声と骨を砕いた鈍い音、そして二人のリアスを連れて戻ってきたロアの鋭い叫び声がほぼ同時だった。
一瞬の閃光だった。
大きな刃が弧を描くようにして振り払われたのだ。
チェザの眼前が深紅に染まる。
風が、動いた。
「……あ」
金の御剣と銀の御剣が一斉に輝きを増し、男が左手の痛みを更に感じたのだろう、小さく声を上げたがその御剣を手放すことはなかった。だが、左手の限界を悟ったのか、がくりと傾いだチェザの身体を見届けることなく、男は何も言わずに踵を返して走り去った。

あとには月姫の巫女とリアスたちと、双身を引き裂かれた銀の御剣の、哀しみだけが残った。
どこかで赤ん坊の泣き声が聞こえた気がした。

一章　惑いの中で　1

月霊ルーシファーは、月明かりの精霊である。
それは、月姫の愛した地とも言われるこのサーラ国にとって、唯一の絶対的存在にして生きるための糧そのものだった。
月の暦を使うサーラ国では十五日、三十日が節目とされ、十五の倍数は特別な意味を持つ。三十日ごとに訪れる満月の夜には聖月祭が行なわれ、三十日ごとに訪れる新月の夜はひっそりと静謐の中に身を置き、外出を控える。また子供は十五歳で一人前となり、仕事を始める。
月霊ルーシファーの姿を見る金の瞳と月霊ルーシファーの声を聞くことができる耳を持っているのが、月明かりの精霊の娘と言われる月姫の巫女である。
彼女たちは月に住む一族とされ、まだ世界ができたばかりのころ、月よりこの世界に舞い下りた月霊ルーシファーの娘はまだ文化を知らない人間を愛し、子を成した。月姫の巫女はその末裔であるがゆえに、月と同じ金色の瞳なのだという。
月姫の巫女たる証は、その金色の瞳だった。
月から舞い下りた娘の名をシスティザーナ、この国の言葉で聖月の乙女という。
そしてまた、月明かりの精霊は時と記憶をつかさどる精霊でもあった。
それゆえに、月姫の巫女はシスティザーナの記憶をすべて、受け継いでいる。けっして他人には話すことのない永遠の記憶を。
哀しみや歓びや、愛や憎悪のすべてを。
天から舞い下りた月姫の、そうした記憶を、彼女たちは持っている。
そして今日、その記憶を受け継ぎ、金色の瞳を宿す女性の名を、システィザーナ・アンディア・ルーシファーという。

秋、暦の始まりは、豊かな果実の月。最初の銀の日を迎え、民はみな一斉に一つ年を重ねる。

月姫の巫女は三十歳になっていた。

一章　惑いの中で　2

「アンディア」
千人前後の民を従えるこのサーラ国において、彼女の名をそのように呼ぶことができるのはおそらくただ一人であろう。
「姉君様？」
私室で一人、座って空を眺めていた月姫の巫女アンディアは振り返り、戸口に立つ女性をそう呼んだ。
部屋といっても、彼らサーラ国の民が使う住まいは、土レンガを使用して作られた空間を、厚めの麻でいくつかに仕切っただけの住居である。仕切られた部屋の中央には少し太めの土レンガの柱を置き、屋根を支えている。屋根も麻で作られているが、防水のために樹脂を定期的に塗っていた。
民たちの家は、月姫の巫女の住まうこの宮のように、たくさんの部屋に分けられてはいない。だが、貧富の差がないサーラ国だから、月姫の巫女のために建てられた聖月の宮を除けば、どれも同じような大きさであるといえる。
「今日はもう準備は何もないと聞いて、会いにきてしまったわ」
「ありがとうございます。姉君様。あまりに盛大な儀式になりそうで、少し心配していましたから」
「月姫の巫女様が行なう金の儀式ですもの。当然でしょう」
風の音のような清らかな声でそう言い、彼女は微笑んだ。
暦のはじめに訪れる金の日に開かれる金の儀式。それは十日後に迫っていた。
「姉君様はどうでした？　二年前……。不安ではございませんでしたか？」
心細い声ですがる妹をいとおしく思い、彼女は首を振ってみせた。
「私の場合は貴女ほど大きな儀式ではございませんもの。訪れた民も貴女に比べればわずかでしょう」

「不安だわ……」
きっとこんなことは肉親である実姉以外には言えなかったのだろう。一つため息をもらすそのときのアンディアは聖性をもって語られる月姫の巫女ではなく、民と同じ、三十歳になったときに行われる金の儀式を不安の中で待っている民の一人に見えた。
「でも、チェザも今年で十五歳では？　銀の儀式が行なわれるのももうすぐでしょう」
「……ええそうね」
平静を装った声だということが、彼女とうりふたつの美貌を持つアンディアにはわかってしまう。
「どうなさったのですか？　おめでたいことですのに」
「時々思うのよ。あの子にはチェザの心が宿っているのかしら……」
「……っ！」
おもわず叫びそうになった。
ため息とともにもらした姉ファーリーの言っていることに、アンディアはもちろん心当たりがあった。
「……まさか、リアスに？」
「今日もカリのところへ行ったわ。ほかの仕事はなにも学ぼうとしないのよ」
サーラ国でもっとも名誉ある称号。それがリアスだ。月の紋章を宿す者とも呼ばれるそれは、サーラ国のために存在し、月姫の巫女を守護し、月姫の巫女を助け、月姫の巫女に絶対の信頼を誓う。
十五歳で仕事を一つに絞り、その自らが選んだ仕事に終身従事するサーラ国には、現在十三名のリアスがいる。
「まさかチェザがリアスになるなんて……」
「チェザは父親の死の理由を少しは知っているわ。それでもなお……いいえ、だからこそリアスへの道を進もうとしているの」
「同じ名前だからかしら？　二人は別の肉体を持っていても同じ心を共有しているのかしら？」
ふと、思い付いたように呟いたアンディアの言葉。

二人ともそれに対する答えは持っていなかった。未来を読み、過去を知る月姫の巫女も、ひとのこころは知らない　　。

「……でも……まだ、会えない、わ」

小さな声で、アンディアは呟いた。姉ファーリーは何も言わなかった。

一章　惑いの中で　3

カキーンと甲高い金属音が響いて、右手に持っていた短剣が後方へはじかれた。
強い力に思わず剣を手放してしまい、それは回りながら数メートルも飛び、土レンガで舗装された地面に突き刺さる。さらに、身体のバランスを崩して右手を地面につけてしまった。
（不覚……っ！）
「勝者。カリ・リアス様！」
審判をまかされた少女が、三日月型にくり貫いた薄い板を左手に持ち替え、この心中を知ってか知らずかうれしそうに高々と掲げた。
三日月は左右対称でなく、どちらかに傾いていることから勝者の象徴とされていた。
その三日月を見やり、ちっと舌打ちする。
また、負けた。
もう数え切れないほどだったけれど、やはり悔しいものは悔しい。
「チェザ」
穏やかな語調。カリはいつも冷静で、それが剣を何度も交えた彼にはわかっていた。カリは二本の短剣を袖の中の腕に隠し持っている鞘に収めて左手を差し出したが、それを睨み付けて自力で立ち上がる。
「なんだよ。大人げねーの」
「そうか？　　お前も暦が改まって、もう大人の仲間入りだろう。チェザ」
戦いやすいように短くたくし上げていた長いラカーユを正装に戻しながら、カリは胸中で苦笑した。この少年の気迫がカリを大人げなく本気にさせたのだとは、たぶん一生気づくまい。
カリは痩身で柔らかな面差しをした二十七歳の青年である。その額にはサーラ国の誰もがうらやむ十字の紋章リアスが刻まれて、赤

茶色の髪の毛はところどころが緑色に染められていた。
少年から大人への転機を迎えたばかりのチェザは、左手の短剣を鞘に収めたあと、刺さった短剣を引き抜いた。
サーラ国では双剣術が一般的である。両手に短剣を持って戦うのだ。剣術に長けているリアスは、必ずこれを会得している。それ以外の民にも遊戯として広く親しまれていた。
人を殺すための短剣ではない。サーラの民にとって短剣とは生命の象徴だ。もちろんその刃は鋭利であり、人の皮膚をたやすく切り裂くだろう。だが、だからこそ両者の間に緊張感が生まれる。それこそが崇高な瞬間なのだ。
「強くなったな」
「口先だけで誉められてもうれしくないよ」
その科白は勝者が言うものではないとチェザは思う。
「賢しい口をきく」
カリは別段怒ったふうもなく、その整った顔に笑みを浮かべた。
が、即座に右から細い腕が伸びてチェザの腕をきつくつかんだ。小柄な影。
「どんな口きいてるのよチェザ！　このお方をどなたと思って？　リアスのカリ様なのよっ」
「なんだよ。暴力女！　んなこと知ってるよ！」
「なーんですってっ！」
振りほどこうとしたが、手を放すどころかさらに強くつかまれ、さすがのチェザもその腕をつかみかえした。が。
「あちっ」
条件反射でチェザは身を引く。少女の腕が異様なまでの熱を持ったからだ。
彼女の肩あたりから、小さな影が姿を覗かせる。トカゲの顔をしたそれはだが、れっきとした焔霊サラマンダーである。いつのまに呼んだのかと、チェザは顔をしかめた。
「おい。ずるいだろそれはないだろ」

「自分の身が危険に晒されたとき、その力を持って全力で護ることのどこがいけないっていうの？」
「晒されてねーだろ」
「殺されそうになったわ！」
「嘘つけ！」
大袈裟に言う少女と本気になって反論するチェザの必死な表情を交互に見て、カリが口元をほころばせる。柔和な顔つきだった。
「……二人とも子供だな」
「おい！」
「カリ様！」
二人の声が交錯した。先に反論したのは少女のほう。
「カリ様、それはあんまりではございませんか！　このフィーザも暦が改まり十五歳になりました。もう立派な大人ですわ。いつまでも子供子供しているこのチェザとは違いましてよ」
ぱっとチェザから手を放して一気にまくしたてる少女の爛々とした黒の瞳を見て、チェザは呆れ返ってため息を一つついた。
「……よくそこまで言えるな、おい」
「フィーザの崇拝するカリ様に暴言を働いたのよ。まるこげにされなかっただけでもありがたく思ってくださる？」
尊敬ではなく『崇拝』ときたものだ。毎度のこととはいえ、さすがに反論する言葉を失ってチェザは黙った。
カリとチェザの打ち合いはいつも、カリの家のそばにある広場で行なわれる。観客は決まって一人。審判を兼ねる、チェザと同い年の少女フィーザだ。
「カリ様。このフィーザをもう子供扱いなさらないでくださいませ。次に訪れる銀の日には儀式を済ませますし、初雪の月にはフィーザも聖月の宮にきっと参りますのよ」
十五歳で一人前とみなされ一つの仕事に絞るまで、子供たちはさまざまな仕事場で雑用などを行ない、経験していく。そして、十五歳の銀の儀式で彼らは一つの仕事を得るのだ。

「ああそうだったな。おまえはリアスになりたいのだったか」
「もちろんですわ。聖月の宮にてフィーザもカリ様とともに月姫の巫女様をお守りいたしますっ」
小さなこぶしを握り締め、嬉々としてフィーザは断言した。彼女の場合、リアスになるのもただカリへの忠義によるものにすぎないという気もする。月姫の巫女ではなく。
不純な動機でリアスになろうとする志願者を、月姫の巫女は即座に見抜く力があるのだと聞いたことがある。
もしそれが本当ならばフィーザはリアスになれないだろうとチェザは思い、少しだけ優越感を感じた。そしてそんな自分を少しだけ醜く思った。

一章　惑いの中で　4

「二人とも銀の儀式が近いのに緊張もしないんだな」
太陽が紅く、西の空を染め始めたころ。
鍛冶屋の手伝いをするからと言って、フィーザがなごり惜しそうな表情でカリに別れを告げて、明日も会うくせにとチェザには悪態をつかれてから。
うるさいわねっとチェザよりよほど大きな声で怒鳴りながらも、去っていった少女の背中を二人で見送ってから。
そういえば、チェザはほかの仕事をほとんど経験したことがなかったと今更ながらに思い返す。ほかのどんな仕事に興味はなかった。いつもカリに学んでいたと思う。
リアスとはなんたるか、を。
（……リアスとは？）
まだ、よくわからないけれど、その答えはもうすぐそばにある気が、した。
「んー？　だってそんな必要ないだろ？」
カリと交えた短剣を左手でもてあそびながら、淡々とチェザは答える。サーラでは両利きが多い。チェザもカリもそうだった。双剣術では両手で短剣を扱う。どちらかの腕の力が劣っていてはバランスが取り難いのだ。
淡白すぎるチェザの返答に、カリは破顔した。この少年はどうしてこう、素直なのだろう。だからこそ、少し困らせてやりたくもなった。
「俺も見に行こうか」
「えー！　いいよべつに来なくてっ」
慌てた様子で口を尖らせたチェザは、身長差のかなりあるカリを見上げた。チェザはまだ伸び盛りだ。同い年の少年たちより少し低いが、その分彼は身の小柄さや軽さをカリとの勝負で利用すること

を知らず知らずのうちに学んでいた。
カリは、チェザにリアスの素質が十分あると思っている。だが、チェザはリアスというものを簡単に考えすぎている気もするのだ。
「……本当によく考えて未来を決めたのか？」
カリの低い声。
短剣をもてあそぶチェザの手が止まった。
（……み、らい？）
しばらく無言だった。
「……」
改めて考えたこともなかった疑問を、今カリから与えられたような気がした。月よりも遠い場所から。
一度も悩んだことなどなかった。定められたことだと思っていた。そこに挟む疑問などなかった。
カリと同じ未来。
そして、同じ名前の父と。
（父君様……）
一度もその言葉を口に出したことはない。
チェザが生まれた日に、チェザは死んだ。
見たことはないけれど、いろいろな人の口から父を聞いて、父の姿を描いていた。立派だったと口をそろえて語られる、サーラの英雄的存在を。
「決めたよ」
チェザに迷いはなかった。少なくともリアスであるカリの前で迷いを見せてはならないと思った。
「なんで？　おれがフィーザみたいに鍛冶屋とかの手伝いしてないから？　狩りのほうがいい？　それとも機織り？　レンガ作り？　いろいろ考えたけど、おれはリアスにしかなりたくないよ」
「……父親であるチェザ・リアス様を追っているのか？」
「……っ！」
そんなんじゃない、と叫ぶつもりだった。即座に否定できると思

っていた。
だのに、言えなかった。
「どんなつもりでリアスになろうとした？」
詰問に近いカリの言葉は、この短剣の刃よりもずっと鋭く痛い。
十五歳とはいえ、まだ幼いチェザにはその質問に答えられるだけの言葉を持っていなかった。
「……じゃあさ。カリは……？　カリはなんでリアスになろうとしたの？　父君様のティエ様がリアスの長だったから？」
「違う」
即答だった。
チェザはそれに驚いた。困らせてやるつもりで言った質問だったのに。
ティエ・リアスは、チェザの父親と同じころに負った怪我が原因で、その数日後に亡くなったと聞いたことがある。リアスの長という地位は、リアスの中で年長が務めるものではあるが、ティエは過去になく五年近くも長であり続けたそうだ。
月霊ルーシファーが彼を選んだのだ、と民は口々に言ったという。
その強さが、カリにもある。
カリの茶色の瞳には、迷いなどまったくないように見えた。それが年の功なのか、本当に迷いがないのかチェザにはわからない。
だが、カリには意志があった。
強く、穢れのない意志。
（おれ、は？）
自問しても、そこに生まれるのは空白だけだ。
「俺はな、チェザ。サーラを護りたいんだよ」
「……サーラを？」
この大地を。サーラという国を。
サーラを護るということがどういうことなのか、チェザにはまったく理解できないでいた。この国に争いごとは少ない。あったとしても誰かを傷つけたりする類の事件はまったくないと言っていい。

月姫の巫女の名のもとに、秩序を約束された地なのだ。
サーラは永遠だ。
誰もがそれを疑わない。
「平和ってわかるか？」
「へいわ……。みんなが幸せなことかな？」
今はたぶんきっと、みんなが幸せと言える気がするから。
「そうだな。そうなんだろう。おれは父に、つまり当時のリアスの長様に、十五歳になったばかりのちょうど今のチェザと同じ状況で言われたんだ。もうすぐ銀の儀式があるというとき」
「……」
チェザは口を挟めなかった。耳をかたむけて、カリの言葉のひとかけらだって逃さないようにしようと思った。
「『おまえは本当にリアスになりたいのか？　私のあとをついてくるなよ』」
（……あ）
今のカリと同じ言葉を……。
「おれは答えなかったよ。銀の儀式の日まで、答えは出なかった」
「……銀の儀式の日にわかったの？」
真摯な瞳で尋ねるチェザに、カリは笑ってみせた。優しい笑顔だった。
「儀式の中でわかった。俺が国のためにできることは、金属加工やレンガ精製ではなくてサーラ国を護ることなんだと。そして月姫の巫女様の瞳が教えてくださった。あの方は当時十八歳であられたがやはり人間ではあられないのかもしれないと思えたよ。月より舞い下りたルーシファー様の娘の化身だ、と」
銀の儀式は、未来を定めるための儀式だと言う。精霊の御名のもと、誓いを立てるのだ。そこでまことの自分が見えて、担うべき仕事を与えられる。
「……へぇ」
カリにそこまで言わせてしまう月姫の巫女とはどのような人物な

のだろう。チェザは少年らしい感情で好奇心を抱いた。
「おれも早く会ってみてーなー」
「恐れ多くもお前の叔母君様であらせられるしな」
母の妹といえども、月姫の巫女である彼女に会える機会はまったくない。月に一度の聖月の祭典で見ることはできるが、もちろん話しかけることは不可能だ。彼女と普段から接し、直に話ができるのは直系の家族とリアスだけなのだから。
「そんなん言っても実感ないよ？　母君様は今日も月姫の巫女様に会いに行くって言ってたけど」
小さいころは、妹に会いに行くといってはカリに預けて一人出かけてしまう母が悲しかった。何故我が子を置いてまで妹に会いに行くのか　　。だが、カリがいてフィーザがいて近所の子供たちがいて、だからチェザは寂しくなどなかったのだ。
「月姫の巫女様も金の儀式を控えておいでだからな。我らリアスの前では何もおっしゃらないがお心細いのだろうさ」
「ルーシファー様なのに」
まだリアスではないチェザにとって、月姫の巫女とは月霊ルーシファーそのものである。チェザだけではない。サーラの民にとって、月姫の巫女は月霊ルーシファーの具現化した姿なのだ。
「月姫の巫女様はルーシファー様の化身であるが、けっしてルーシファー様そのものではないさ」
「……？　よく、わからない。じゃあどうして月姫の巫女様がルーシファー様の化身だとわかるの？」
素直にチェザは首をかしげた。この少年は好奇心旺盛で、ときおりカリですら返答に窮するほど困難な疑問を投げかけるときがある。彼のこのこころがいつまでも消えなければいいとカリは思う。
そして、この場合の解答はたった一つだ。
「おまえにリアスの資格があればわかるさ」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7313x/

【夢幻の大陸詩】　月姫楽土の子供たち

2011年11月6日03時16分発行